

加藤 良造

一九六四年、岐阜県多治見市生まれ。一九八七年、多摩美術大学を卒業。同年、第十四回創画展に初入選、以後創画会に所属して出品を重ねる。多摩美術大学准教授。北宋山水画の影響を受け、会場では三年かけて制作した大画面の作品を出品した。二〇一七年に彩鳳堂画廊（東京）で個展を開催。

青山 多治見市の出身で、お父様がやきものの加藤孝造先生、お兄様も愛知県立芸術大学で洋画を学んで描いてらっしゃいます。ご自身は多摩美術大学に進み、日本画を学びました。美術にご縁の深いご一家ですが、美術を仕事として目指したのはご家庭の影響がありますか？

加藤 父はやきものを造る陶工で、毎朝しっかり仕事場に出て、帰ってくるという環境だったので、自分自身どこかの会社で働いてという環境をあまり想像できなかったんだと思います。

青山 多摩美術大学で日本画と出会って始めたと聞いています。工芸ではなく絵画を選ばれたのは？

加藤 絵が好きというのが一番にありますし、平面の絵を見てその世界に入ることが楽しかったということもあります。工芸という選択はなぜなかったものですか。兄は油絵に行きましたし、近くにやっている人がいないところをやってみようという

消極的な理由もあります。

青山 家族や育ってきたところから離れたいというのは表現のため？

加藤 多治見は大好きなんです。でも中にいるとわからないこともあるというのと、やはり若い時に外側に行きたいということがありました。

青山 大学で日本画を制作するようになって、卒業後、団体の創画会に出品しています。日本画の団体がいくつかある中で、比較的新しいーといっても半世紀以上の歴史がありますがーあえて創画会を選ばれたのは？

加藤 やはり在野というか。多摩美自体が在野なんですけども、その自由が一番ありました。私が学生だった八〇年代は加山又造先生が大学にいらっしゃいましたし、山本丘人先生も生きていらっしゃいました。ちょっと上の先輩方が創画に出していて、自分の目には勢いよく映りました。本当に色々なパターンがあって、創画はよく創画カラーといえますけども、その自由度が最も高く見えたという、魅力があったんですね。

青山 最初から風景を？

加藤 そうですね。風景が多かったですが、最初から山水ではなく、場面をコマ割りしたような。底辺に時間的なものに興味があったのは同じですが、出し方としてはよりその時代っぽいというか、コマ割りで視点を動かしていくという方法で描いていました。

青山 多視点の風景というのが、近年のテーマである山水境、山水画に転換していくには、何か大きなきっかけがあったと思うのですが。



加藤 コマ割りで朝昼晩を一つに画面に描いていたんですけども、どうしても一個で複数の事柄を表現できない。どうしようかと思いましたが、ちょっと古典的なところに目を向けようかと思いました。個展を一九九五年にやっただんですけども、その時にある人から中国の古典を見なさいとアドバイスを受け、興味を持って見始めました。そんな中ちょうど台北の故宮博物院で七〇周年の大きい展示会をやっていました。その時、中国の山水の一番ピークである北宋山水画に出会って衝撃を受けたというのが一番のきっかけです。その時はよくわからなかったんですけど、何かわからないけどものすごい、今までに見たことがない絵が目の前にあるということと感動を受けて一気に山水画に軸をずらしました。

青山 中国の北宋山水画との出会いがかなり深い部分で衝撃を与えたんですね。

加藤 そうですね。それまでは割と絵を理解することができると思っていました。どいう風につくられているかというのが何となくわかっていたんですけど、北宋山水画はすごいのはわかるのですが、何がすごいのかがよくわからないのと、山が描いてあるだけですが、全然違うこと言っているようにも見えないし、素材も絹本に墨で、少し色は入れますが、その単純なものの繰り返しで何でこんなに複雑なものができるんだろうということが一番すごかったですね。

青山 中国の絵画や画論を勉強するときに、よく「三遠法」を使っていると聞きます。高遠、平遠、深遠。つまり、自分の視点から仰ぎ見るような視点、まっすぐに平行に遠くを見据えるような視点、高いところから深いところをのぞき込むような視点、その三つの視点を組み込むことが中国の山水画の基本中の基本だと。複雑な視点を意識

しますか？

加藤 はい、ものすごく僕は押さえてやっています。ものの捉え方の問題になってくるんですが、山水画は自然と一体となることの実践です。それは理念のようなものではなく、把握するときに自分が見ている視点というより、そのものが全部を見渡す、表現できる。横から見ると、上から見ると、斜めから見ると、それで全部を表現しようという。それに対して西洋の風景というのは何かがあったらそれがどこからの視点でどんな要素からできているのかというのを分析的に見て行って、物を把握します。そこで視点がずれてしまうと、違う方向から見ることになるので、西洋ではご法度なんです。西洋人がこういう多視点の山水画を見ると散漫に見えると言われるようなんですが、よくよく考えれば時間が変わればものも見方も変わるので、どっちが合理的かといえば、ぼくにとってはこっちの方が合理的だったということですね。

青山 現代の日本画家の中で中国の山水画を研究するのは珍しい例かと思いますが。

加藤 そうですね。北宋時代は西暦でいうと大体一〇〇〇年なんですけど、その時代に頂点を迎えてそれ以上やることがないぐらいの完成度まで行ってるんですね。そのうえにどんどん新しい価値をのっけて展開し、日本はその後の文人画の流れで山水画をつくっています。そして明治に日本の流派を新しく一個のものにまとめたときに、南画系など元々流れてきたものを切ったわけです。それで新しい「絵」が自立したときに教養がないとわからないものは避けるようになり、より視覚的な方向になります。あまりにも教養に縛られすぎて新しい価値を見つけられなかったということもあると思います。新南画として文人画は復興しますが山水画はほとんどありません。そもそ



加藤良造《山水境》二〇一四・二〇一五・二〇一六年

も江戸の華である琳派にはほとんど山水画が描かれていません。その辺りも興味深いところですが、それでほとんどパターン化したものとして先細ってしまった。北宋のコアな部分を日本人はずっと見ていなかった。范寛（註一）、郭熙（註二）の本物を見たのは昭和の戦後になってからではないでしょうか。

青山 范寛、郭熙は北宋画の頂点の人で、それこそ国宝、世界の宝みたいな絵を描いている人です。

加藤 故宮博物院の前は紫禁城にあった訳なので見ることができない。

青山 加山又造さんも晩年に北宋山水画に倣う形で屏風の水墨山水画を発表していました。それは昭和に入ってからそういう出会いがあったからなんですね。

加藤 だと思っんです。正確な情報じゃないですけど。

青山 今回、出品した作品は右から左に時間が流れていきます。制作年も分かれていて、一番右の三枚が二〇一四年、真ん中の三枚が二〇一五年、左の三枚が二〇一六年の制作です。それぞれ構図がつながっていて、右から左へうねりながら絡みあいながら複雑につながっています。これ、まだ先があるのでしょうか。

加藤 やろうかなと思っっています。

青山 壮大な作品になりそうな予感がして、ワクワクします。見ていると、例えば最初のところでは、遠くの方は山の合間がかすんで見えて、明るいとこが見えてくる。わけいると山間の雲がたまっているようなところもあり、そうなる自分上からのぞき込んでいるのだからかと感じる。次のところでは岩を見上げているような視点も出てくる。歩きながら自分の立ち位置がどんどん変わっていくような気がして。視点

が急に変わるのを自分の中で整理できないままに、あれ、私今どこにいるんだろうという風に思います。加藤先生の作品の魅力はそういうところにあると思います。ぜひ細部を見て、かつ全体を見るような見方をしてもらいたいです。全体の構図は二〇一四年のころから考えていましたか？

加藤 そうですね。二〇一四年から三年同じ展覧会が続くことになったので、一つのテーマで、同じ大きさを続けていこうと。

青山 創画展の作品を拝見していると、近年は縦長の構図で見上げるような感じで山が積み上げられていくような印象を受けていたのですが、このように横にダイナミックに展開していくのは公募展の作品とはまた違った迫力があって、今回出品をお願いします。やはり東洋絵画ならではの視点で、現代の日本画として取り組むというのは今後もしばらく続く方向性でしょうか。

加藤 そこは変わらないと思います。

青山 今、母校の多摩美術大学で学生さんを教えてらっしゃいますよね。若い人は流りのものに目が向いたり、伝統的なものも引用のように切りとって取り入れる。シミュレーションのようにモチーフとして取り入れたりすることもあります。若い人へ向けて自分なりの思いを伝えていきたいというのはありますか？

加藤 文脈を違えるというような美術の方法がどれだけ有効なのか。流れとしては当然ありうる流れではあるんですが、それが十年二十年続くとは思えないし、そういうときに何が頼りになるかという、どういう流れで自分が今そこにいるのかというのをきっちり把握してもらいたいですね。自分の後ろばかりではなく極力前に前に

註一 中国、北宋初期の山水画家。仁宗の天聖年間（一〇二三～三三）なお在世した。
註二 中国、北宋の山水画家。神宗（一〇六八～八五）のとき、宮廷画家として活躍した。



目線は行かせるようには言うんですけど、中々興味がもてないというか、今という時間に目が行くことが大きすぎて聞き入れる隙間がないというのはありますね。まだ始まったばかりです。少しでもじっくりと絵のことを考える作家に育ってくれるよう根気強く語っていかうと思います。